

今日は天后宮天妃菩薩堂をテーマに歴史を知る。

御焼香しようか

歴史を考えると、遺産文化財建造物がある、そのひとつがこの天后宮天妃菩薩堂「これは何だろう？」と、その時代に建てた時の想像（タイムスリップ）をしてみる、「想像できましたか、頭で映像が映りました？」その映像を仮想し、その仮想を証明していくことが歴史研究。歴史は仮想の部分があり、あらゆる見解唱えがあるのもその面白さである。私たち美崎校区にも偉大な歴史研究者「仲原善忠先生」がいますよ「わかりますか？」「誇りに思いますか？」今日の資料はその仲原先生他の本を参考にしました。そんな偉大な研究者がまたこの美崎校区から生まれ、美崎校区からの歴史研究の入口になればと思いつつみなさんとこれから想像（タイムスリップ）して行きたいと思つています。

1、記念碑を読み合せながら進めましょう。

琉球・中国との交流の中で入ってきた航海の神である媽祖（天妃）信仰が、氏神信仰としていきている事例も興味深い。久米島の天妃と似ているボッサドン（菩薩殿の意味）と呼ばれている媽祖像が薩南（種子島から与論島）の山村で今も人々を見守っている。

↓

2、航海の守護神天妃と関係する冊封使の事を知りましょう。（資料1）P1～P6

↓

3、トゥマイグラーへ移動

その冊封頭号船航海（天妃菩薩）物語  
（美崎小学校 50 周年記念誌編集資料 2）

P7～P10

↓

4、その時のことを自分なりにイメージして見ましょう。

↓

5、仲里間切蔵元へ移動

救助した 200 名の冊封使一行、その正使と副使を蔵元へ案内したことをイメージ

↓

6、菩薩堂へ帰り、天妃宮菩薩堂建立の説明まとめ。

観音堂の跡地に菩薩堂説明（資料 3）

P11～P12

↓

7、6 年生の現在の社会授業との関連資料

P13～P14

## 冊封頭号船航海（天妃菩薩）物語（50周年記念誌編集資料2）

### 1、南下

時が変わろうとしているのか、淡く朱をはらい、しわれたような白い雲がおおうなばらを指して飛んで行く。大海の向こうには、王孫の琉球が待っている。

時がたつ。

1756年、春の気配が感じるところに北京を離れてから70日、2500キロを南下した冊封正使（全魁）、副使（周煌）ら一行は福州へ到着、疲れがないと言うと嘘になる。けわしい自然を相手に旅の大変さを身にしみて思う。

思わぬ大命を受け、大国の中華（中国）と百有余の進行国のひとつ、琉球中山王の請冊に応じるため、北京から阿僧祇の里をたどりたどり降りてきた、仰いでみれば福州に着くと、天帝（夏の神）が行き幸する時期となる。

中華（中国）の玄奥が北京だとすれば福州はその足下すなわち玄関に相当するかも知れない。その街はそうぞうしく、衆人が足げなく通うさまに踏み場もないほどで、そこで宿をとり休息した後、一行は吹きこぼれる異国風味の潮の香りをしながらそれぞれの役目を果たすため、街へ散って行く。交易に使われる搭乗員の人選そして唐人の持ち出し品の数、分量またその整理と日々準備に追われ続け、そんな忙しい時突然眩しいものが向こうから来る、人の世を糾う縄のように赤舌日と吉祥日が経廻る、つまり歴日の大安日に楚々として天妃堂を参拝したときのこと、おもむろに拝礼して、香をたいて三度下に額を傾ける。本来は、国の安全と皇帝の災と大義の成就と、なによりも航海の無事を神に託さないといけませんが、やわらぐ天妃と脇の威光を笠に着て、とじこもる者が居ても不思議ではなかった。しかし誰一人交易の利益はおろか、評価への期待とか一攫千金の絵空事は夢さら口にせず、雷が落ちた後のような沈黙に我が身をゆだねる心地いいその瞬間、神と共にやわらぎ、迷宮の戯曲をつくり琴の音を奏でながらそれぞれ物思いに吹ける、荒てて頭を降ると風が吹き、風が巻いて吹いている、きっと千里眼が風を見切り、順風恰好な追い風を手向けてくれるだろうと、  
南無、妙靈詔天妃菩薩

## 2、出航（帆）

冊封正使と副使と随員（武官や兵員）の乗った頭号船と二号船、そしてみちづれに接貢船は、1756年7月5日に出航した。

神亀に見送られつつ五虎島、一枚岩が風化してまるで五頭の虎が吠える様を見ながら一斉に外洋へ繰り出す、程なくして馬祖島、そして鷄籠山（台湾基隆）をつぶさに魚釣島を過ぎ、赤尾岩礁のかたわらを滑るように通過し、航海は順風満帆だった。

とりわけ頭号船の速度は群を抜いて、みるみる他船が小さくなり米粒となりやがて視界から消えた。船の天妃様のお香は朝夕絶やすことなく焼く、神事と言うべきか航海は万里な風に守られ、その風に乗る五虎門を出て3日目に待望久しい島影が見え始める、姑米山（久米島）、一行は思い思いに胸を躍らせたことだろう。ところが喜びはつかの間、嘘のように風が止んだ。一行は何の手立てもなく時として運ははかなくも思う。

## 3、風（なぎ）ノーイ

6月13日、久米島の海は光り風ぎ、場所は具志川間切番所。

王府（首里）から近じか冊封船が通る旨の連絡を受けてからというもの、感じることもできない風しか吹かない、間切番所は緊張の糸を解く間もなく、打って変わって今日はいやうなるような暑さときてお手上げ状態だった。時頼怪しい悪夢が忍び寄る、海は油が散ったような風ぎ（アンダノーイ）、4時とはいっても、夏空の日は高い、だんだん斜陽となり、突然、視界の色が変わる大船の影が忍び込んできた。素っ頓狂な声が響く、口に手を当てながら、その影がだんだんと大きくなりしだい苦しい裏声もかすれる、やがてその奇声が身振り手振りにかわり、交信に幾度か動きがとまりとまりしている間に、息をはずませた番詰所のひとりひとりと集まってきた。

「はっさよー、うすましい船やっさー」「唐船でえーがやー」

「息吹ち、唐船や有らんしが。彼の方角んどう得ねー、唐上いでえーしが」

「ふん成程。冊封船どう得ねー、唐からぬ下い船とう一緒作らんねー作んぐとう、案為え方角ぬ当たらん。有無、呉れ一御可笑ん」

「完ちえさ。確か御上から周知有たぬ御冠船どう得ねー、西側とう北側ぬ中海路か基ぬ間どう通過ぬはじえしが」「近頃や、唐上いぬ周知や無作とう聞かさらんしが」

「待ていよー、急じなさんなよー、若し呉りが南蛮船どう得ねーちやーすぬ場合が」

「やーぬ眼一かいや、杉板船（ボート）に可視んなー」

「有らんよー、不可視しがよー、有無、考えーていみーねー、くーてん遠さぬでーる」

「程遠さん、程遠さん」

詰番はうたがうような気持ちを抱いたまま、急傾斜の山路を降りて番所へ通報した。

直ちに具志川間切番所から仲里間切蔵元（大和横目勤番）へ使者が走った。

船は静寂を保ったまま、無風の海に浮かんでいる。どこまでも透き通る海と空だった。どこを目指すのか旅人、果てしない水平線に打つ手なし、今は船の動きを固唾を呑んで見守るだけ、憩うひまもないのにまた夕暮れが近づく。

「朝風り夕風りてい、船や動かんしが」「潮一の南風走いでんてえー」

「潮一かい乗ていどうる」「故障りていあらんがやー」

幾度同じ会話が交わされたことだろう。いろんな憶測がみだれこむ。

夜になり、月夜が海面を白くおぼろに敷きつめ、のっりののっりとどろ海のように。

思い切って、陸から火を挙げて合図すると、船から微かな光が揺れて見えた、合図でふねの様子がわかるようになり、

「来船の許しをお願いしているな」「あれは唐船の合図だ」

「矢っ張り、御冠船に間違いない」

17日から18日の両日、東北から逆風が吹き、20日から23日にかけて、それが激風から暴風雨に転じ、多くの嘔吐者が出たので、久米島からの接封の方が、冊封船を訪ねて、上陸を勧めたが、正使は安全を配慮して乗員一行に上陸を許さなかった。

#### 4、神佑（ジンユウ）

信実、異国の地で死ぬことになるかもしれない。山のような波が、船を木の葉のように扱う、時には山と山の谷底から、一気に山の頂上に持ち上げられたらと思うと、ふわっと谷底へ投げ落とされる、想像を絶する恐怖。その際手綱を断ち切り、海に投げ出され漂流した方が得策とも考える。

風は、衰えることなくすさまじくなり、縄が切れ船は、その場から解き放されたように横ばいに押し上げられ、うねりの山波は水平に移動しながら、その反動で船のいたるものをさらって大音声と共に座礁した。海水が吹き出し、敗れた船板のいたるところから、みるみる浸水が始まる見上げれば雷がなり、おどろおどろしい横殴りの雨と風でもう終わりかと覚悟を決めたとき、地から湧いたか、天から降って来たのか、神秘的な光が、煌びやかに放ちながら宙に舞う「天妃様の御光だ」「天妃菩薩の思し召しだ」衆人が異口同音の叫ぶと、しめやかに鳴りを潜めていた船がふわりふわりと浮くと、自らは岩石の一部と化したように微動だにしなくなり沈没を免れたらと思うと、残された道はひとつ、衆人はこれを機に乗じて小舟を降ろし、手に手に大事な品々を載せめでたく上陸がかなった。

この事の総ては、天妃の御加護で九死に一生を得た乗員2百余人が全員の無事にすんだことは言うまでもない。

## 5、救助

その後、冊封使一行は、仲里間切の蔵元に約2週間程、滞留することになるが、一方「陸の側」即ち、喜久村家（間切地頭代）の所蔵の「口上覚」の写しか草案らしきものによるとその件は、大事件であったことが書かれている。

### 口上覚、喜久村家（地頭代）

恐多御座候得共申上候去子六月勅使様御乗船御渡海砌當間切真謝泊之沖江被遊御潮掛候内・・・・・・・・

強風により海が大荒れとなりましたので、心配でたまらずとりもなおさず縄索やいかりをたくさん用意したが風波はますます酷くなるばかりで夜になると間切役人をはじめ村人達も次第に集まり（幸いに雨が小止みになり）乾いた薪を要所所で燃やし南と西の干瀬崎から囲い込むように、又別の下手のほうも篝火を焚き連ねて船の様子を見守っていましたが、突然縄索が切れてしまい船が大波にさらわれあつと言う間に黒石という岩礁にへ打ち上げられてしまいました。船は上よ下よの大騒ぎで、勅使様の御姿すら見分けることが出来ないくらい大事でした。そこで一身を賭してお助けするのが何よりの御奉公だと衆人の考えも一致して、村人からは泳ぎの熟練者らが荒れ狂う海へ飛び込み、次々と船へ辿り着くと、手振り身振りで合図を交わしながら天馬船（荷物や人を本船まで運ぶ小さな船）を降ろし、救助に備えようとしたが大波に吞まれて困難をきたしてました。一時が万事、一体如何なることやら、はらはらしながら見ていたのですが、海の熟練者達が遠巻きの輪を徐々にしばめながら励まし励まし安全な陸のほうへ手際よく助けることができました。両勅使様（正使は全魁、副使は周煌）は衣服がお濡れになっただけでお怪我もなく首尾よく助けられたことは幸甚この上ないことでした。その後、蔵元へご案内した両勅使様は先刻来の濡衣を有名な衣裳へお召し替えていただき、尋いで心許しの持成しですっかりお寛ぎになり一日のお疲れを癒したしだいでございます。

その後も荒れ狂う海のさなかを泳ぎの熟練者達が再度船に渡り、大帆頭などの帆を海に切り落として陸の方へ引き、それを利用して貴重品（中国皇帝が琉球国王に任命する紹勅、王冠、王服）を運んだことも詳しく説明している。

冊封正使（全魁）、副使（周煌）ら一行は、久米島で静養した後首里王府へ向かい到着し、冊封の儀式の勤めを果たして、約8ヵ月間滞在して帰唐しているが、その間本地で今までの足跡を印している、つまりそれは九死に一生を得た2百名余の神佑を感謝する意味で天妃堂の創建を国王の支持で実現したことである

※1756年に天后宮を真謝に建立

※冊封正副使他が寄付及び寄贈品など送助

※国王（尚穆18才）も瓦、工費を用立て、王の命令で建立

### 観音堂の跡地に菩薩堂説明（資料3）

尚真王が久米島を征伐することになるが、沖縄本島では首里に按司を集め掟き領地を治め100年後地頭代として置かれるが、久米島には按司掟を課せられた形跡はなく、首里政府に久米方代官が置かれ地頭代喜久村家までの100年のことは不明。※堂の比屋の乱後、この人を中城（仲里⇒宇江）按司とし更に具志川仲里間切の総地頭にして、名前は「中城親雲上」が治める。尚真王は極めて温和な政策をとり久米島へ役人を配して押さえつける事はなく寛大に取り計らっている。

中城（宇江城）親雲上とは、久米法印と言う波の上寺の住職が隠居し故郷である久米島に観音様と帰り、真謝に観音堂を建て信仰する弟子で、久米法印の死後、それを継いだ中城親雲上が宇江城の城跡の下現在の所に移し信仰しているとある。

久米法印は遺老説伝によると、日本に渡り密教を学び、波の上護国寺の住職なつたと記されていると云う。

読み方⇒親雲上 ペーチン

宇江城の観音堂元は真謝の天妃菩薩堂（ブサードー）の敷地にあり、中城親雲上が現在の宇江城に移したもので、ブサードーの隣「寺の側」（ティランスバ）、県道へだてた「寺の門」（ティランゾー）の屋号が残る。ティランスバは中城（宇江城）の直系の本家と由緒ある所と云うので別邸等も考える。天妃菩薩堂の建立前は、久米法印の観音堂があったと云われる。

※堂の比屋の乱（堂の比屋は久米島紬の養蚕から色々な貢献をしたとも云われる）

中城（宇江城）按司の家来として務めていて、首里王の久米島征伐で城が焼かれ火の海になりどうしようもなくなった按司が子供を堂の比屋にたくし自分は不明になる。堂の比屋はしばらくこの子を育てていたが後にその子を誤ち病死として、首里へ行き王に色々と解きほぐし説明自分を中城王にして貰う。その時代位から按司時代（琉球王国の戦国）から平和な琉球、武器を持たない国に移り変わる狭間で、琉球そして久米島島民の為にも改革政治家「堂の比屋」は自身が、良い意味でのクーデターを考えていたのかもしれない。

参考に

琉球本島も三山統一（尚円志）し武器のない国（尚真）になるまではこうした陰謀が多々あり、有名なのが護佐丸・阿麻和利の乱等、せめぎあいは凄かったかも、でも平和への改革政治の始まりでもあります。

「ワカチャラ」の乱が久米島（登那覇、涙石）にもあります、こうして琉球王国は三山統一から、より以上の中国ほか外国との交易を密にしハブ島としての機能を十二分に発揮し知能高い商人も久米（首里那覇）で沢山（儀間真常、蔡温）生まれる、その時代に薩摩（島津）藩の侵攻での日本戦国時代真最中の貢献は沢山あったであろう。

この事はまたの次の機会にと 생각합니다。

↓

こうして私たち美崎校区の先祖は偉大なことを成し遂げたこと「温故知新」、祖先の事を知り繋ぎ今の自分と結びつけ、それが自分の心の土台基本となり、久米島から遠く離れ暮らしても、俺そして私は久米島美崎校区（マージャ、ウチャム、マドゥマイ）で生まれたんだと誇りに思うことが出来れば幸い、そしてもっと自分のルーツをしり、学びの肥やしになればと思う、色んな歴史世界大小問わず、そのひとつが久米島美崎校区の歴史、すぐそこにある自分の足元を起点に根っこをはわせ、生まれた島を大切に誇りに思えばいつも自分の支え久米島が肥やしになり栄養を与えてくれる。

私も苦しい時がありました、そんなとき、いつも祭事のときはウグァンしてミハナをしてくれた、池に落ちてパニックになった後、元気がないとマブイストーンを呼び戻し返してくれたときの事を思い出し「オーバー！俺を助けてくれよ！」とふと心で叫んだとき、涙が自然に後から後から溢れ出てくる、その涙が枯れたとき何か心がスカット晴れ、気持ちが前向きに変わった時がありました。心の置きどころをいつも持っていれば、ずっと受け繋いでいる自分の先祖（ルーツ）が心の支えになることを信じてます。

その教え、気持ちをいつの時代にも残したいそう思いながら今日のタイムスリップを解きます。

「久米島の美崎」HPにも遊びにきてください。ブログもありますのでよろしくどうぞ

URL ↓

<http://takryou.pluto.ryucom.jp/>

## 久米島と奈良朝の交通

久米島が石器時代（高い丘地に住み家）から、今的美崎校区（沖積平野）へ一軒づつ移住し米作の農耕が始まる頃に、奈良朝廷に貢物をあげている。元明天皇和銅7年（西暦714年）に「・・・南島奄美信覚球美等島人52至・・・」[続日本紀](#)。奄美は沖縄本島含む、信覚が八重山、球美が久米島にあたる。※現在「球美」を使い久米島の歴史を伝えようとする周知が生まれる大変いいことだと思います。

奈良の大仏が出来てから6年あと[奈良朝廷](#)が最も盛んな時は仏教が非常に盛んで[支那](#)と朝廷との交通も盛んに行われていた「[遣唐使](#)」ほとんどがお坊さん学生で、ひとつの船に多くて120人が乗り、航海も慣れてないため度々漂流し、その船は[久米島にも流れ着き](#)流れついた人たちから朝廷の都の色々な情報を聞きそこに行きたいことが芽生え、奈良へ貢物を持ち行くようになり、たいそう久米島の為になった事でしょう。それが[平安時代](#)になると地方の政治がみだれ瀬戸内海も海賊が横行するようになり段々交通も減り、その空いた期間が言葉風俗習慣をだいぶ遠くさせた。日本語と沖縄語は同じでしたが、現在でもいくらか似ているところもありますが長い間の交通の途絶えそして気候風土の違いが沢山の違いを生み出し独立国へ変わる。

## 久米島と沖縄の関係

日本と久米島は奈良朝時代に交通があったことは分かったが、近くの沖縄本島との交通のことは「[英祖王](#)」の時から書かれて、それは[源為朝](#)が沖縄に来て大里按司の娘と結婚し、その子が「[舜天王](#)」となる。鎌倉時代から沖縄の歴史も段々明らかになり、舜天の次に[義本](#)でその次が英祖王で、その時代に久米島の使者が貢物を英祖王に捧げ臣下になったと云われ、久米島を支配し租税を取り立てたことはなく貿易関係であったことを「知ると、久米島の使者が頭の優れた人であったであろうことは誇りにも思う」。そのときの「[おもろさうし](#)」の歌に、久米の「こいしの」があちこちの港に出入りし「こいしの」が買ってきたこれこそが本当の京都の鉄と貿易の名人が久米島出身でその人が死んだ後「こいしの」が買ってきた同じものを買ってこれる後継人ができず、内地（ヤマト）の貿易商の名人に頼むと云う船出の歌である。鍛冶屋のことも沢山歌われ、役人ではなく民間人同士で交通貿易があったことが分かる。後に英祖王の次、[玉城王](#)は酒色にふけ悪政だった為に、他按司がそれに反発し、南山、中山、北山にわかれ三山分立時代の戦国となる。日本は[北条高時](#)、[足利尊氏](#)等の戦乱時代。[久米島も影響を受け武力](#)をもった按司があちこちに城を構え人民を支配する「[按司時代](#)」となる。この混乱期のことを沢山「おもろさうし」に歌われそして今解かれ知ることが、「私が今まで小学校、中学校、高校では学べなかったことで感心衝撃を受け、久米島（沖縄）の人間として力となり、考え方そして自分を置く位置も変えてくれたことに気づかされる。」そして佐敷按司「[尚円志](#)」は武略に優れ、中山王につくと、支那と日本とも交通し力を蓄え（[その大きな役目人材が久米島であったであろう](#)）、北山も支配その後南山と支配し三山を統一することで、沖縄の政治・経済・文化を一挙に変えていく、その[影響も久米島](#)に及んでくる。